

その1 平面の変容傾向

大阪市大生活科学○村上佳子・住田昌二・碓田智子、琉球大教育 鈴木雅夫

＜目的＞戦後の都市化や生活様式の変化に加え、鉄筋コンクリート造の住宅が主流になったことなどによって、沖縄の住宅は、沖縄独特の伝統的な形式を残しつつも、しだいに多様化してきた。本研究は、新築戸建住宅の平面分析を通じて、近年の沖縄の住宅がどのように変化しつつあるのかを明らかにしようとするものである。

＜方法＞近年、沖縄での新築活動の中心は、那覇市からその周辺市町村へと移行しつつある。この点を踏まえて、那覇市に近接する、豊見城村、南風原町、佐敷町、与那原町、大里村、西原町の6町村を対象に、1993年度の建築計画概要書から抽出した、新築戸建住宅200戸の平面構成を分析するとともに、1978年に那覇市で採取した新築戸建住宅89戸の平面構成と比較し、この15年間での変化を検討した。

＜結果＞今回採取した平面プランは、「LDK型」、「茶の間型」、「続き間型」、「LDK+続き間型」に大別できる。「LDK型」が58%を占め、ついで「LDK+続き間型」が17%、「続き間型」13%、「茶の間型」12%であった。平均延床面積は、140㎡である。「茶の間型」は小規模な住宅に多く、延床面積が160㎡以上の規模の大きな住宅では、「LDK型」が減少し、「LDK+続き間型」が3割に増加する。1978年の採取平面の平均延床面積は121㎡で、「茶の間型」が36%、「LDK型」29%、「続き間型」21%であった。延床面積の拡大と「LDK型」の大幅な増加が、この15年間での大きな変化である。また、1978年調査では、過半数の住宅で、和室数が洋室数を上回っていたが、今回の調査では、洋室数が和室数を上回る住宅が9割近くを占め、洋室化の傾向が明らかである。